学　位　論　文　要　旨

動物とふれあう環境教育の意義に関する研究
―動物園と学校における幼少期の実践を事例に―

A study on the Significance of Environmental Education to Interact with Animals
–A Case Study of Childhood Practices in Zoos and Schools –

農林共生社会科学専攻
農林共生社会科学大講座
河　村　幸　子

本論文の目的は、第１に動物園の中の子ども動物園、第２に保育園、幼稚園を含めた小学校での動物飼育とその環境教育活動を対象とし、そこで行われる「ふれあい」活動が環境保全意識をもった主体をどのように形成していくかを明らかにすることである。

子ども動物園と学校教育を対象とする理由は、以下のとおりである。まず、子ども動物園についてであるが、動物園環境教育の目標は、動物に関する事実を理解し、その生息環境を守り、動物と人との共生を図る人材を育成することであると考える。動物園に飼育されている動物は、厳密な意味で野生動物ではなく「動物園動物」であると考えられる。動物園で飼育されている野生動物（動物園動物）を通して、本来の野生動物の姿を子どもたちにどう理解させるのか。その動物の個体としての生態がどう伝えられるのか。子ども動物園における教育（動物園における子どもの教育）という視点から動物園環境教育を捉え直し、その課題と可能性を見い出すことは今後の動物園のあり方を示唆するものであり、大きな意義があると考える。

科学的な思考力はさらに低年齢、幼少期から育成する力であり、より多くの幼少期の子どもたちが科学的な思考力の基礎と関心、感性を持つべきである。科学的なものの見方、考え方の素地を身に付けさせることが必要であると考える。動物の大きさや形態や体色、動き方、生活の仕方の特徴をつかむという実際の観察をとおして、その動物を「知る」こと、生きている人以外の動物を楽しみながら知らせることである。動物園は幼少期の子どもに、楽しく科学を伝える場であると考える。

学校教育に注目する理由についてであるが、子どもたちのほとんどが一日の長い時間を過ごすのが保育園や学校である。そこには共感できる友だちと保育者、教員がいる。学びのための施設・設備も揃っている。学校飼育動物は明治以降、全国の90%の学校に存在していた。学校はだれもが動物とふれあうことのできる場であった。ところがコロナ禍も落ち着き始めた現在でも、全国の学校飼育動物の存在は50%を切っている。動物にふれたことのない子どもだけでなく、教員の中にも動物にふれたことのない、動物飼育経験のない割合が増えている。人と動物との共生を学ぶ上でも、環境保全教育の基礎としても、これは重要な課題である。

生物多様性が急速に失われている現在、社会教育と学校教育の両面から、動物福祉に重点を置きながら、動物介在教育の意義を問い直すことが必要であると考える。

第1章では、幼少期における動物園と学校教育の場での動物との環境教育としてのふれあい活動の意義を明らかにした。動物福祉に着目した、目的に合わせた活動は多くの動物園では見ることができなかった。「ふれあい活動」の目的を達成するためには、大人の役割が重要であり、関わり方も様々な工夫が取り入れられる。ふれることのない「ふれあい」という「ふれあい活動」の概念の拡大である。学校教育では年々動物飼育から手を引きつつある現状が見えた。学生の学ぶ教職課程の中に動物飼育の意義や方法についての内容が含まれていなかったことも明らかになった。

第2章では幼少期の学校教育の場における生き物との「ふれあい」の歴史と現状をみてきた。学校現場は動物を飼育することから離れている学校が多いことが明らかになった。学習指導要領や指導資料では、幼稚園や学校という全ての児童が学ぶ場における動物介在教育の重要性が明記されながら、教育実践に活かせない理由は何か、そこにある問題点を明らかにした。しかし、そんな中でも学校、地域、自治体、獣医師の協力と教員の熱意により、動物介在教育が進められていることも明らかになった。幼少期の動物とのふれあい活動は非常に重要なものであり、地域ボランティアなどを組織し、地域の力で学校教育を支えることの重要性を明らかにした。

第3章では恩賜上野動物園子ども動物園での湿地教育におけるふれあいにおける動物園環境教育の内容と課題を見い出した。

第4章ではCOVID-19の影響によって動物園が人獣共通感染症にどのように対応したのか、調査し考察をまとめた。

動物園では動物福祉に重点化した「ふれあい」活動を目指している。「ふれあい」活動の内容は幅広く、多様な形で「ふれあう」ことの可能性を見い出すことができる。ただ、幼少期の幼児・児童にとっては直接ふれることのできる動物または具体物を用意し、直接見る、ふれる、感じる体験を用意することが望まれることが明らかになった。今後更に、動物園、大学、学校その他の組織と連携し、動物福祉を考慮しながら、「ふれあう」環境教育実践を蓄積することが課題である。